

2021/3/21 大齋節第5主日
東京聖三一教会 ヨハネ 12:20-33
司祭マリア・グレイス笹森田鶴

栄光を受ける時が来た

B年での大齋節第3主日、第4主日、第5主日と続けて、わたしたちはヨハネ福音書に記されている主イエスさまの公生涯での三度の過越祭に起こった出来事を読み進めています。ヨハネ福音書は、過越祭というユダヤ教の大事な祭りの時での主イエスさまの言動を通して、神さまがこの世界で実現されようとしている全く新しい世界の実現、そしてすべての人への救いを描いています。

大齋節第3主日では、それまで大事だと思われていた犠牲の儀式や神殿そのものがもはや不要となっていることを、第4主日では神の国での食事の先取りが目の前で展開されている様子を、わたしたちの物語として聴いてきました。

その経過の中で、主イエスさまはずっと、「わたしの時はまだ来ていない」とおっしゃり続けてもいました。ヨハネ福音書での「わたしの時」とは、主イエスさまの死の時を指します。

そして、とうとう今日の福音書は三度目の過越祭です。この時以降、主イエスさまは十字架への道を一步一步進まれていくこととなります。主イエスさまにとっての最後のこの世での過越祭が始まろうとしていました。

エルサレムは街自体が浮足立っていました。年に一度の過越祭が近づいています。遠方からも多くの人びとがエルサレムにやってきますし、何より祭りの準備で街は賑わっています。

一方、宗教指導者たちと主イエスさまの関係は緊張の度合いを高めていました。ラザロを墓から復活させたことにより、主イエスさ

まへの批判は殺害計画が最高法院で協議されるまでとなっていました。そのような中、しばらく姿を見せていなかった主イエスさまがエルサレムに入城され、人びとの大歓迎を受けます。その直後の出来事が今日の福音書の物語です。

ユダヤ教の信仰をもつギリシア人が主イエスさまに会いにやってきたことがきっかけとなり、今日の出来事が展開していきます。このギリシア人の登場によって、主イエスさまは重大な宣言をされました。

「時が来た。人の子が栄光を受けるべき。」

それまで「まだわたしの時は来ていない」と言い続けられていた主イエスさまが、とうとうこの時、ご自分が死ぬ時が来たとおっしゃったのです。しかもそれが「人の子」、つまりご自分が神さまからの栄光を受けるべき時だと言うのです。

主イエスさまの死は、見せしめの死刑です。この世界で考えうる最もみじめで悲惨、そして痛ましく目を覆いたくなる、誰もが避けたいと願う孤独な十字架上での死です。その死が神さまの栄光を現すことになることは、当時のユダヤ人にとっても現代社会に生きるわたしたちにとっても理解し難いことです。しかし主イエスさまはそれが栄光を現すと断言されます。

栄光を現すとは、ギリシャ語に訳されたもともとのヘブライ語の意味をたどると「重みがある」という言葉です。ヨハネ福音書では、この言葉は主イエスさまの死と復活を表しています。神さまの栄光、重みというものは、主イエスさまの死と復活に直接つながっているというのがヨハネの理解です。

栄光と死、重みと殺されている軽さ、主イ

イエスは、この矛盾に生き続けられました。ご自身が苦しみの中で死んで犠牲となることによって、すべての人を救うためです。

「すべての人」のためですから、世界でもっとも悲惨で苦しい死でなければなりません。そうでないと、誰かが取りこぼされてしまいます。すべての人を救うために、ご自身が最も苦しまれる道を選ばれました。

そしてその道のりの中で「今、わたしは心騒ぐ」とつぶやかれます。まるでゲッセマネの園での祈りのように揺れる思いを吐露されます。しかしその心騒ぐ思いも含めて、主イエスの選びは神さまによって肯定されます。

「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」

これまでの出来事も、そしてこれから殺されていくことも、主イエスのすべてが神さまの重みを示すことになると、神さまご自身が宣言されたのでした。

人びとはやはり理解できませんでした。それでも主イエスは人びとに語り続けることを止めません。またご自身が十字架上で死に、その後天にあげられるときに、すべての人を自分のものとへ引き寄せようと、約束してくださいました。

わたしたちは今も、ただただこの救い主のくださった恵みの中に生きています。わたしたちは、救い主の成し遂げられた重みに耐えられずに、目をそらしてみたり中心を避けてなるべく自分に影響がないように通ろうとしてみたりします。けれども主イエスは、そのようなわたしたちを救うために死という出来事までに身を沈めてくださいました。わたしたちがいつかいく死の中にもいてくださることによって、すべての人をみもとに引き寄せてくださるためです。そのように、ありとあらゆる瞬間に、ありとあらゆる場所にい

てくださるこのお方こそ、永遠の命そのものです。

大斎節の後半のこの時、三度目の過越祭に向かって世界を全く新しく造りかえてしまう出来事に突入しようとする主イエスの姿や思いから離れることなく、ゴルゴタの丘に向かって追いついていきたいと心から願います。

この世の矛盾や揺れの中に身を沈めたとしても、そこにもキリストはいてくださいます。そしてわたしたち自身が他の人びとのために生きぬくための霊を注ぎ、力を与えてくださることを信じています。

皆さまのために祈っています。

父と子と聖霊のみ名によって、アーメン